
第一次ニャル聖杯戦争

ムトナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

第一次ニヤル聖杯戦争

【Nコード】

N3798P

【作者名】

ムトナ

【あらすじ】

ニヤルラトホテプ星人のニヤル子が始めたゲームは、「聖杯戦争シクーム」というどこかで聞いた事があるような名前の、SAN値が下がりそうなゲームだった！

* 作者は勢いで始めました。どこに行くかはわかりません。

ステータス画面（第一話分反映・随時更新）（前書き）

各サーヴァントのステータス画面（風）。

物語内で判明したものや、作者が「いいやー、書いちまえー」と思った情報が載ってます。

順番は、マスターの名前の50音順。

ステータス画面(第一話分反映・随時更新)

インジャーリーグアンプ

マスター：阿良々木暦 真名：???

属性：???

筋力 ??? 魔力 ??? 耐久 ??? 幸運 ??? 敏捷

??? 宝具 ???

クラススキル

???

保有スキル

???

宝具

???

セイバー

マスター：衛宮士郎 真名：アルトリア・ペンドラゴン

属性：秩序・善

筋力 B 魔力 B 耐久 C 幸運 B 敏捷 C 宝具 C

クラススキル

・対魔力 A・・・A以下の魔術は全てキャンセル。事実上、現代の魔術師ではセイバーに傷をつけれない。

・騎乗 B・・・騎乗の才能。大抵の乗り物なら人並み以上に乗りこなせるが、魔獣・聖獣ランクの獣は乗りこなせない。

保有スキル

・直感 A・・・戦闘時、つねに自身にとって最適な展開を”感じ取る”能力。研ぎ澄まされた第六感はや未来予知に近い。

・魔力放出 A・・・武器、ないし自身の肉体に魔力を帯びさせ、瞬間的に放出する事によって、能力を向上させる。

・カリスマ B・・・軍団を指揮する天性の才能。カリスマは稀有

な才能で、一国の王としてはBランクで十分と言える。

宝具

インビジブル・エア

・風王結界 C・・・不可視の剣

エクスカリバー

・約束された勝利の剣 A++・・・光の剣。人造による武器ではなく、星に鍛えられた神造兵装。

ディテクティブ

マスター：草壁美鈴 真名：????

属性：????

筋力 ??? 魔力 ??? 耐久 ??? 幸運 ??? 敏捷

??? 宝具 ???

クラススキル

???

保有スキル

???

宝具

???

セイバー

マスター：草薙護堂 真名：????

筋力 ??? 魔力 ??? 耐久 ??? 幸運 ??? 敏捷

??? 宝具 ???

属性：????

クラススキル

・対魔力 ???

・騎乗 ???

保有スキル

???

宝具

???

ハンドラー

マスター：嵩月奏 真名：夏目智春

筋力 D 魔力 E 耐久 D 幸運 E - 敏捷 D 宝具 ?
??

属性：秩序・中庸

クラススキル

・演操者 C+・・・機巧魔神を呼び出し、制御する能力。スキル
ランクが高いほど細やかな制御と魔力の浪費を抑える事が出来るよ
うになる。また、副葬処女を視認する事が可能。

保有スキル

・高所恐怖症 C・・・高所において、冷静な判断が出来なくなる。
・契約者 A・・・悪魔と契約した者。使い魔ドウターを従えることが出来
る。スキルランクは契約した悪魔との絆の深さに比例する。

・????

宝具

???

キャラクター

マスター：高梨亮 真名：????

属性：????

筋力 ??? 魔力 ??? 耐久 ??? 幸運 ??? 敏捷
???? 宝具 ???

クラススキル

・陣地作成 ???
・道具作成 ???

保有スキル

???

宝具

???

アーチャー

マスター：遠坂凜 真名：エミヤ

属性：中立・中庸

筋力 D 魔力 B 耐久 C 幸運 E 敏捷 C 宝具 ???

クラススキル

・対魔力 D・・・シングルアクション一工程による魔術行使を無効化する。魔力避けのアミュレット程度の対魔力。

・単独行動 B・・・マスターから魔力供給を断ってもしばらくは自立できる能力。リンクBならば、マスターを失っても二日間現界可能。

保有スキル

・千里眼 C・・・視力の良さ。遠方の標的の捕捉、動体視力の向上。

・魔術 C・・・オーソドックスな魔術を習得。得意な力カテゴリは不明。

・心眼（真） B・・・修行。鍛錬によって培った洞察力。窮地において、その場で残された活路を導き出す戦闘倫理。

宝具

アンリミテッドブレイドワークス

・無限の剣製 E（A++）固有結界。視認した武器を複製する。ただし、複製した武器はランクが一つ下がる。

ステータス画面（第一話分反映・随時更新）（後書き）

因みにFate組のステータスは完全にコピペ

0 話「プロローグは黄金のはちみつ酒の味（タイトルに意味はない）」

「誰より、よく〜ばりなのは〜」

一人の銀髪の少女がソファにうつ伏せになり、機嫌良さ気に歌を口ずさみながら携帯ゲームで遊んでいる。

服装はノースリーブにチェック柄のベスト、そして同模様のミニスカートと現在の体勢を考えるとなかなか格好であるが、そんな彼女を視界に納めている少年の心はカケラも動かない。

彼にとって少女は異性ならぬ異星人であり、つまりはエイリアンである。プレデターと戦って負けたアレである。あんなのに欲情する——一部の人間には居るかもしれないが、少年にとってそれは天地がひっくり返ってもないことなのである。

「なあ、ニヤル子」

「なんですか？真尋さん」

ニヤル子と呼ばれた少女が声の主である八坂真尋へ視線を向ける。

「お前、何時になったらこの家から出て行くんのだ？」

まるで予定調和のように気負った風もなく、しごくうんざりと真尋はニヤル子に問いかける。

「いきなり何ばゆつとね!？」

真尋のふつうに考えればあんまりにもあんまりな発言に、ニヤル子に変な方言で驚きをあらわにする。

「いや、だから何時になったらこの家を出てくのかと」

ニヤル子に非難されている理由がまるでわからないといった風に問い直す。

「出てくも何も、私お母様から滞在許可貰いましたよね！？というか、真尋さんいきなり何なんですか？なんでツンデレート（ツンデレ比率）が初期状態に戻っちゃってるんですか！？暴言も多少やわらかくなって、フオークで私のことを刺さない真尋さんは何処にいつちゃったんですかア！？」

「……なんだそれは。一体何処の二次創作の僕だ？それは」

「逢空万丈先生の！公式の！オフィシャルの！あなたですよ！！」

ニヤル子の剣幕に、真尋はとりあえず話題を変えることにする。

「んで、さつきからお前はそんな上機嫌で何やってるんだ？」

「ああ、これですか？良くぞ聞いてくれました！これは『聖杯戦争シクーム』というゲームでして……」

話題を変えられたことにも文句を言わず、むしろ良くぞ聞いてくれましたとばかりに嬉々として説明を始めるニヤル子に真尋は己の選択のミスを悟ったが、しょうがないので聞いてやる事にする。大丈夫、SAN値はまだ十分のはずだ。

「まず最初に、七人のマスターと呼ばれるメインキャラを設定しまして、次に各マスターに対して一騎ずつ計七騎のサーヴァントを設定します……」

なお、ニヤル子の説明をまとめるところだ。

・七人のマスターと七騎のサーヴァントを設定。

・各サーヴァントには該当するクラスをコンピューターがリストアップするので、その中から選択する。また、一部サーヴァントにはエキストラクラスと呼ばれる特殊クラスが存在するが、一プレイに付きエキストラクラスを選択できるサーヴァントは一騎のみ。

・基本的なプレイは全てコンピュータ任せであり、プレイ時間に応じて「神の見えざるポイント」が加算されていき、そのポイントを消費する事によって「運命イベント」と呼ばれるゲーム全体に対する強制力を持ったイベントを発生させる事が出来る。

・プロアトランティスリプレイ、通称「P A R」によってエキストラクラスの制限など一部システム上の制限を無視している。

一部真尋による解釈が混じっているが、おおむねそういうシミュレーションゲームらしい。後ついでに、サーヴァントが一体どんなもののレクチャーを受けたが、真尋にとっては至極どうでもいいことだった。

「ニアル子も、聖シクやってるの？」

赤い髪を頭の両サイドで縛っている少女——クトウグアがそんな二人の会話に入ってくる。そしておそらく「聖シク」とは「聖杯戦争シクーム」の略称だろう。

「おや、“私も” ってことはクー子もやってるのですか？ 私は今が初プレイですが」

「ニアル子はキャラどんなのにしたの？」

「ふっふっふー、良くぞ聞いてくれました」

そういつてクー子だけではなく真尋にまで見えるように、ゲーム機のディスプレイを見せるニアル子。

そこにはマスターとなる人物の名前と、彼らが使役するサーヴァ

ントのクラスが表示されていた。

マスター：阿良々木暦：サーヴァントはインジャリーヴァンプ
マスター：衛宮士郎：サーヴァントはセイバー
マスター：草壁美鈴：サーヴァントはディテクティブ
マスター：草薙護堂：サーヴァントはセイバー
マスター：嵩月奏：サーヴァントはハンドラー
マスター：高梨亮：サーヴァントはキャスター
マスター：遠坂凜：サーヴァントはアーチャー

どうやら並び順は五十音順らしい。

「基本的に無難な組み合わせ」

「そりゃあ、私王道大好きっ子ですから。まあ、せっかくマスターに縁のゆかりもないサーヴァントを召還できる仕様ですので、一部は違いますけど」

「それと、原作キャラを入れてるのはストーリーの進行のため？」
「ですね。初回プレイなんでノウハウを知っている人物が居た方がスムーズですし」

真尋が軽く現実逃避をしているうちに、ニャル子とクー子が設定したキャラクターについてアレコレ話し合っている。というか誰が王道大好きっ子だ、この邪神界一のトリックスターが。

「なあニャル子、マスターに一人ほど生身でサーヴァントとタメ張れそう……というか、むしろお前がサーヴァントになるべきだろ。みたいなのが混じってるんだが……」

真尋にはナチュラルにバランスブレイカーが入っている事に、突っ込まずにいられなかった。

「あー、実はその人のサーヴァントの宝具がなまら魔力が必要でして、それを補えるマスターは……と考えた結果、そうだったので」

「実も蓋もないな。と思ったがよくよく考えてみたら、こいつがプレイするゲームのゲームバランスが崩壊してても自身にとってはごくどうでもよかったので、真尋はそれ以上は口を閉ざした。」

「さあ、では第一次ニヤル聖杯戦争スタートです！」

「すぐ呪われてそうな聖杯の名前を叫びながら、ニヤル子はゲームのスタートボタンを押した。」

0 話「プロローグは黄金のはちみつ酒の味（タイトルに意味はない）」（後書き

ニヤル聖杯戦争始めました。（冷やし中華風に）

1話「始まりは突然に。もしかしたら終わりも突然かも」

衛宮士郎と遠坂凜は目の前にいる二人の人物——いや、正確に言うならば二騎のサーヴァントの姿に戸惑っていた。

「セイ、バー？」

「アーチャー……」

青い騎士王と紅衣の英雄——彼らのかつてのサーヴァントが目の前に佇んでいた。

「お久しぶりです、シロウ」

「どうした？我がマスター。そのような間の抜けた顔をして」

まるで変わらない二人の態度にどう反応するべきか、いまだに混乱覚めやらぬ二人。

ただ口を衝いて出る言葉は「何故」という疑問符。

「“何故”？何故といわれても、サーヴァントが魔術師の目の前に現われる理由はただ一つしかないだろう」

やれやれと頭を振り、尊大に腕を組む。

「聖杯、戦争……」

士郎の言葉か凜の言葉か、どちらかともなく吐き出された言葉にアーチャーは肩をすくめて鼻で笑う。そのジェスチャーが肯定の意味だということが、魔術師二人には手にとるように理解できた。

時を同じくして、全てのマスターとサーバントが互いのパートナーと対面する。

ある者には再会を

ある者には邂逅を

ある者には予定調和を

ある者には混乱を……

時代がかった洋館の玄関先には、その名に冠されている桜の大樹が存在する。

そのすぐ脇で少年は待っていた。

何故自分がこの場所にいるのか、そういった疑問は当然のようにあった。本来ならば自分がまだたどり着いていない場所であり、同時に自らの足でたどり着かなければならない場所であるのに自分はこの場所にいる。

そんな事態であるが、不思議と心は落ち着いていた。

待ち人はまもなく来るだろう。ありえないシチュエーションの中でもそれだけは確信があった。

そして、その時が来た——足元で丸まっていた己の名前の一字を持つ絆の証が、身体を起こし小さく鳴く。

洋館の扉が開き、一人の少女が姿を現す。

「……っ！」

長い髪を後ろに束ねた少女が、少年の姿を視界に納めると驚きの表情を浮かべ、目を見開く。

彼女を前にするまでは少年自身も、彼女の姿を前にしたら駆け寄って抱きしめようかと柄にもないことを思っていたが、いざ少女を目の前にして出来たのは微笑を返すだけであつた。

だが、少年はそれでも良いと思つた。

例えこれが、本来ありえないイレギュラーな事態でも、こうして彼女と再び出会えたのなら。

例え自分達が、サーヴァントとマスターと呼ばれる関係であつても、こうして彼女と同じ時を再び過ごせるのなら、些細な事だ。

そう思い、少年は己の契約悪魔契約悪魔に呼びかける。

「やあ、嵩月……ひさしぶり」

「夏目……くん」

こうして、少年と少女は再開を果たした。

草薙護堂が眠りから目を覚ますと、そこは自分の部屋ではなく彼の相棒の部屋だつた。

「っ!？」

その事実が頭に浸透すると、護堂はすぐさま飛び起きる。

何故自分はこんなところにいるのだろつか。

昨晩は確かに自分の部屋で床に就いたはずなのに。

慌ててこの元凶と思われる相棒の姿を探すが、その姿は何処にも見えない。

そうして部屋を見渡す事により、その部屋の違和感に気づく。

いつもは多くのものがひしめいているこの部屋が、妙に落ち着いている――否、そうではない。この部屋には圧倒的に物が欠如している。

もちろん、今護堂自身が寝ていたベッドやその脇にあるサイドテーブルや本棚などは存在するが、そこに飾られているべき物収められているべき物が存在しない、まるで本来の部屋の間取りを真似ただけの部屋。

そのことに考えが至ると、護堂はすぐさまベッドから抜け出すと、ようやく自身の身に起こった一つの変化に気がつく。

それは護堂の服装。昨晩は確かに寝巻きに着替えたはずなのに、今の格好は護堂の通う城南学院の制服なのである。むしろ何故今まで気づかなかったのかとも護堂本人も思うが、それほど気が動転していた――ということにしておくのが優しさであろう。

閑話休題。

こうした事実から、護堂は一つの結論に至る。これは自分の相棒によるいたずらではないと。そして、一体なにがどうなっているのかわからないが、いち早く現状を理解しなければならぬとも。

一度なすべき事を決めてしまえば、護堂の行動は非常に迅速的だった。

まず、今まで自分のいた部屋を出て、キッチン、リビングダイニング、更には洗面室やバスルームまでくまなく調べたが、やはり家具や食器の類は存在したが私物とおよそ呼ばれるものが存在しない。

「あとは、ここだけか……」

護堂が前にするのは2LDKの間取りの中の最後の一部屋で、自分の相棒の使用人の私室だ。

個室ともなれば本来ならば優先的に調べるべき部屋ではあるのかもしれないが、護堂は本来のこの部屋に入った事がなく、なまじ間取りだけとはいえほぼ完全に模倣されただけに、勝手に入るのが憚

れた為最後に回しておいたのである。

「アンナさん……ごめんなさいっ」

この場にはいない本来の部屋の主に謝罪を述べながら、部屋のドアを開ける。

ベッドとサイドテーブル、さらにクローゼットや机、本棚など置かれていた家具に特にこれといって特徴がないものの、やはり物が圧倒的に無い為かひどく生活臭が欠如している部屋。

そしてその部屋のベットに腰をかけている、おそらく護堂と近い年代であろう東洋人風な少年。

その少年と護堂の眼が合う。

「……………誰？」

「えっと、せいばー？のサーヴァント？らしいです」

護堂の疑問に少年が、非常に不安が残る回答をした。

1話「始まりは突然に。もしかしたら終わりも突然かも」(後書き)

第二話です。一部マスターとサーヴァントが登場。

というか、基本的に智春組のシーンが書きたかっただけ。(おい

スラクラは小説基準、Fate組に関しては誰ルートとか基本的に考えてません、なんか都合のいい設定ということにしてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3798p/>

第一次ニャル聖杯戦争

2010年12月14日17時30分発行